おおとめいり遺跡

大溜入遺跡調査会

もくじ

4 大溜入遺跡の発掘……関俊彦

6 発掘域における遺構の分布……内山新吾・斉藤智夫・松田昌治・山津慶子

7 発掘地点の層位……岡本雄二・桜井美有紀・中島雅子

8 1号土坑はじめに掘られた落し穴について……清水利明

10 1号土坑……再利用した落し穴について……大貫靖理

12 1号土坑における堆積土と出土遺物……滝水利明・大貫靖理

14 2号土坑について……佐藤晴

16 2号土坑の土層と出土遺物……佐藤晴

18 3号土坑について……山本義一郎

20 4号土坑について……上野晶之

22 4号土坑の堆積土と遺物……上野晶之

24 円形凹状遺構について……坂後明

25 炉穴（ピット）について……榊松成人

26 大溜入遺跡の発掘……関俊彦

31 Otomeri Site……T. Seki, M. Akama, J. Hirada

八千代市大溜入遺跡

序　文

開発の進む本市にあって、その変貌は著しいものがあります。たしかにこれら開発は、人々の生活水準を高めるという目的があると思います。しかし祖先から守り伝えられてきた、かけがえのない文化財を不注意な行為によって失うことのないよう、私たちは努めていかなければなりません。

本書は事業者と協議を経て、発掘調査を実施した大溜入遺跡の報告です。盛夏に調査を担当された関俊彦先生はじめ、学習院大学考古学研究会の皆様の努力で、ここに刊行のはこびとなり深謝にたえません。

また本書が広く活用いただけ、研究の一助となれば幸いです。

昭和57年3月　八千代市遺跡調査会長
村田和彦

大溜入遺跡の発掘

住宅の波　都心に近い周辺都市では、ぼうだいな人口をまかなうため住宅建設がたえない。かつて八千代市が市制をひく前は、湿地と畑地がひろがる地として、まわりの人びとからうらやましがれていた。しかし東京に比較的近く、展開に船橋・習志野・千葉・佐倉という市をひかえているため、急速に自然景観は悪化してしまった。そして、この状態はどんどん進みつつある。

こんかい発掘調査した場所は、交通の便や環境にもめぐまれ、さらに湿地となっていたので、不動産業者には格好の地であった。

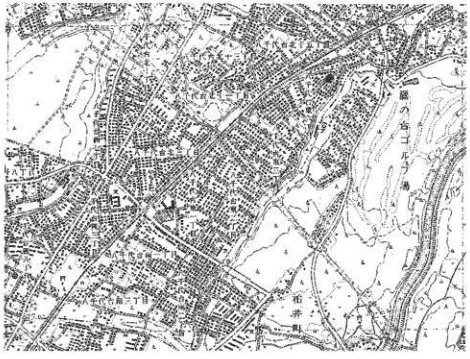
千葉県八千代市八千代台東５―12番地を購入した洋伸不動産株式会社は、ここに住宅を建てるため、1980年10月に確認許可願いを八千代市に提出した。この時点では、ここが周知の遺跡として遺跡台帳に登録されていなかった。

調査へ始動　1981年２月、八千代市教育委員会で、この地を試掘した結果、縄文時代早期の炉穴１基と土壙２基を確認した。そこで市は、会社にたいし住宅を建てる前に発掘調査をするよう通知した。その後、会社は千葉県と八千代市の文化財関係者と数度にわたり発掘調査について会合をひらいた。行政側は《大溜入遺跡調査会》をつくり、調査団を組成して、発掘をおこなうことを会社に指示した。

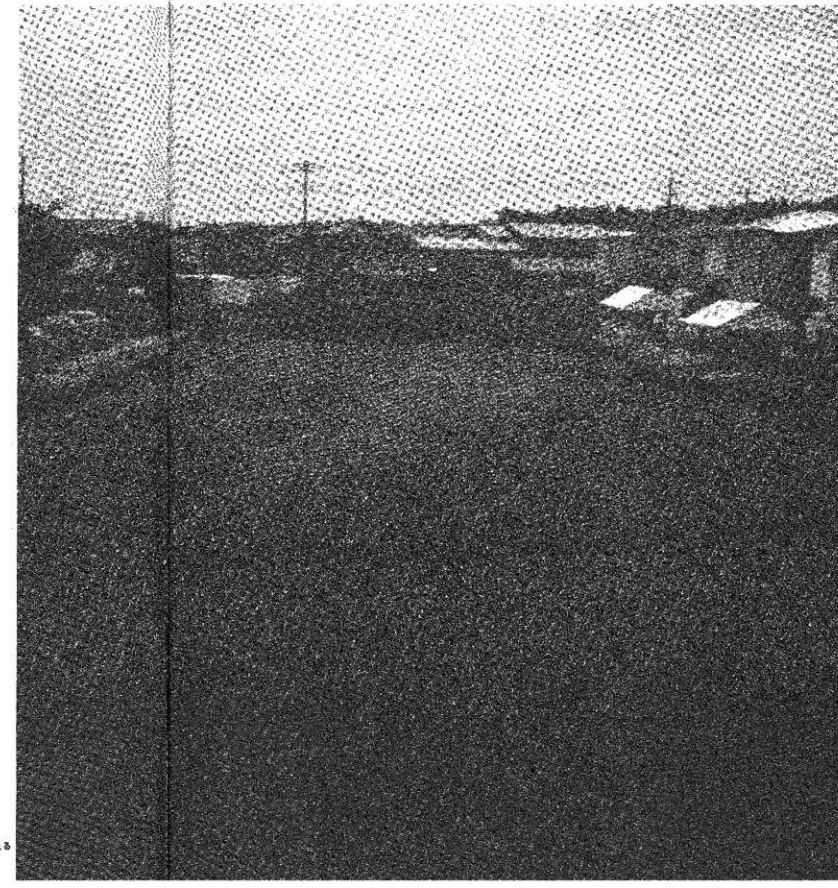
大溜入遺跡の担当者には、会社側は鈴木隆三部長と福田和雄氏が、県文化課は佐久間豊氏、市文化係は朝比奈竹男氏がなった。

６月、遺跡調査会が発足して、会長に市教育次長の村田和彦氏、副会長に学習院大学教授の紫垣祐氏が選ばれ、１週間後に私が団長に指名され、調査員に学習院大学考古学研究会（責任者山本賢一郎）の会員があたることになった。

発掘調査は、調査会の指示にそって実施し、1981年８月１日から31日まで、炎天下で休みなくつづいた。　（間　俊彦）



大溜入遺跡の位置



発掘域の北から南を見る

発掘域における遺構の分布

発掘範囲　遺跡の四方を家がかこみ、まるで中庭を掘るような感じである。こうした状況のため、遺跡と考えられる内側２ｍの全敷地を発掘した。

ほぼ南北に２ｍ四方のグリッドを54個、東西にも２ｍ四方のグリッドを14個設定した。そして保存地域となる範囲外を全面発掘し、遺構の確認につとめた。グリッドや遺構の名称は下図にしめしてある。

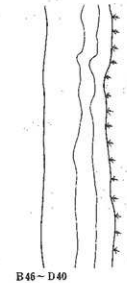
発掘は、Ｃ17からＮ17を結んだ部分から北へむけて開始した。ある所では、小砂利や松根がローム層まで混入したり、ゴミを埋めてあったり、覆土がなくなっているなど、地表面の攪乱が多い。また地表面を平坦に整地しているため、現在の等高線をひいても無意味なので、本遺跡ではローム面を対象に洪積世鉄末の面を追った。図に描かれている等高線は、旧地表面のものである。

本遺跡で、もっとも高い地点はＩ17からＬ17にかけた南側で、北にむけてゆるやかにさがっていく。つぎはＭ17からＫ37、そしてＧ31にかけて－25cmのラインがあり、北へ８から26ｍほど平坦面がひろがる。あとは北西にむかって斜度が増し、谷へとつづく。最高部と最低部では比高差が２ｍある。

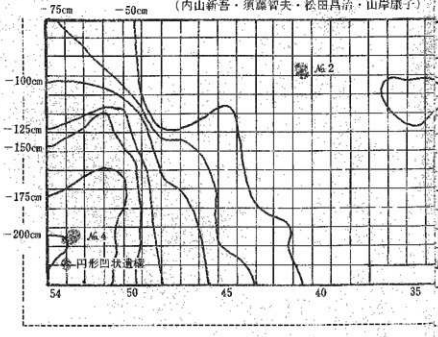
確認された遺構　落し穴と考えられる土壙４基、性格不明な浅い土壙１基、ファイヤーピット（炉穴）１基である（下図）。落し穴のうち１号と２号は－40cm前後、３号は－80cmの平坦面に、４号のみが－190cmの斜面に掘ってある。浅い土壙は４号土壙と接する所に、炉穴は３号土壙の横に存在する。

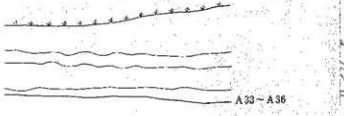
各種の遺構が分布する面をみると、台地の平坦部と斜面に点在し、３号土壙と炉穴、４号と５号土壙群にわかれる。いったい、このあり方は、どんな意味をもつのであろうか。ただ、このたびの調査範囲が細長い区割で、しかも台地の尾根部の北側ということもあって、明確な答えがでてこない。

（内山新吾・須藤智夫・松田真治・山岸康子）



B46～D40





A33～A36

発掘地点の層位

堆積土の層位　本遺跡の地層は、近年になって手をくわえたとはいえ、復原ができない状態ではない。発掘域は南北に長く、東西に短いため、堆積土のあり方も、長軸にそって解説をしてゆこう。長さ100余ｍにおよぶ断面のうちで、堆積土の整序な地点をえらび、南から北へと順を追ってのべてみる。

Ｃ６→Ｃ９グリッド　３号土壙と炉穴の西側部分で観察した結果、４層の堆積がある。上層は粒子のこまかい暗褐色土が15cmほどあり、Ｃ７までのびている。Ｃ８にはなく、次層のローム粒子を均一にふくんだ粘性の多い明褐色土が表層で、厚さは30から50cmある。下層は粘性質の明褐色土が、５から25cmの厚さで、ほぼ連続している。

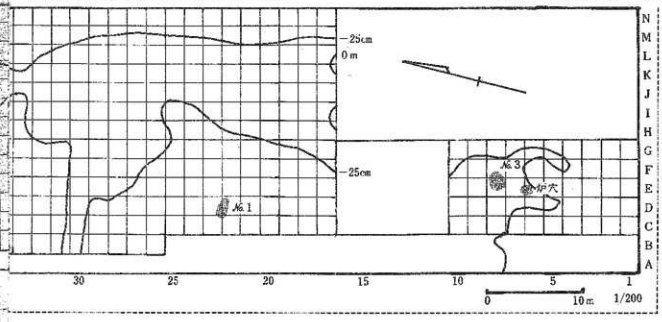
Ａ26→Ａ29グリッド　ここは１号土壙の北西部にあたる。表層は灰褐色土が20cm前後帯状にひろがり、その下に黒色土が５から30cm、さらに褐色土が５から15cmつづく。それから暗褐色土が、最下層はローム塊が少し入り、赤色のスコリアをふくんでいる。

Ａ33→Ａ36グリッド　このグリッドでは４種の土の層位が帯状に平行に見られる。上から黒色土層（10から25cm）、褐色土層（35から55cm）、黒褐色土層（７から25cm）、暗褐色土層とつながる。この層序が、本遺跡の従来の地層なのである。

Ｂ40→Ｄ40グリッド　黒色土層が15から35cm、褐色土層が15から35cm、暗褐色土層が45から60cm帯状にある。

各グリッドの土層をながめると、少しの差はあるが、ほぼ同じような状態で堆積していることがわかる。ただ北側へむかうにしたがって堆積土が厚くなるのは、南の谷から吹きあげる風が頂部の土を北の斜面に運んだからである。遺跡付近の地形を見ると、遺跡のある台地は馬の背のようなかっこうをし、年間とうして北から南へ、あるいは南から北へ風が通る。たまたま遺跡が北に寄っているので、南からの風でより多くの土が運ばれたにすぎない。また風の方向と落し穴の関係があるのか、ないのかも注目される。

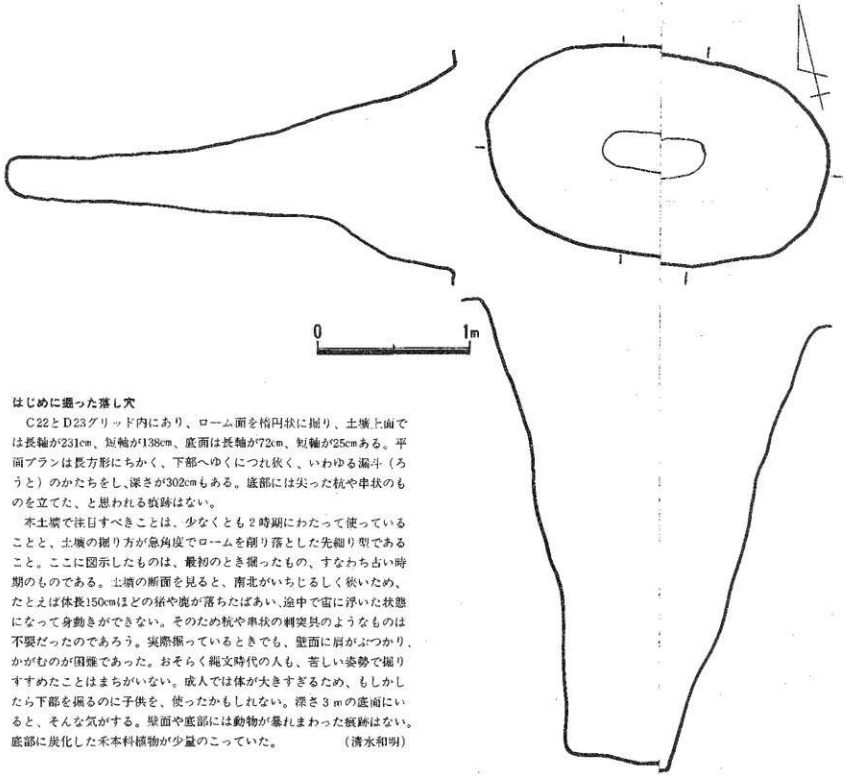
（岡本聰子・桜井美有紀・中島雅子）

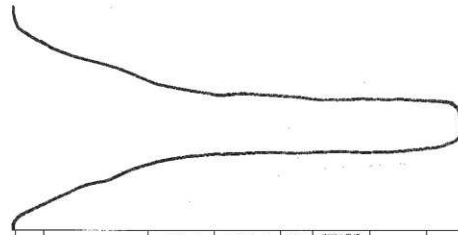


A26～A29

C６～C９

1号土壙――はじめに掘った落し穴について――





	形態	上面(cm) 長軸	上面(cm) 短軸	下面(cm) 長軸	下面(cm) 短軸	深さ(cm)	底面の最低に対する主軸方向	出土遺物	備考
1号		231	138	72 142	25 42	−302 −184	東	縄文前期中葉の土器	再利用
2号		196	110	185	80	−238	東北	縄文前期中葉の土器	
3号		245	180	116	53	−160 −173	東北		縄文前期?
4号		245	181	165	79	−150 −168	西北	縄文前期中葉	
円形凹状		165	108			−10 −20		縄文前期の土器	
炉穴		135	120	100	60	−35		縄文早期の土器	下層測表の時

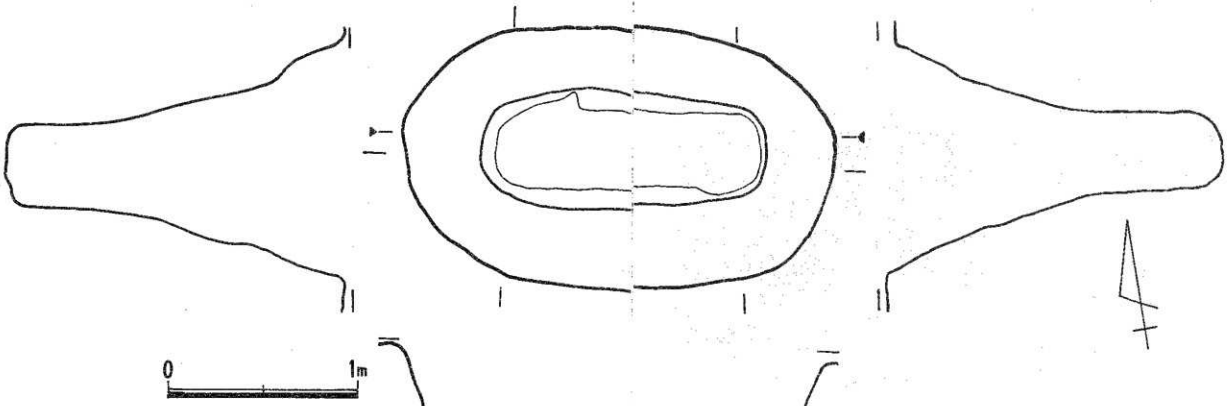
発掘された遺構のプランと大きさ

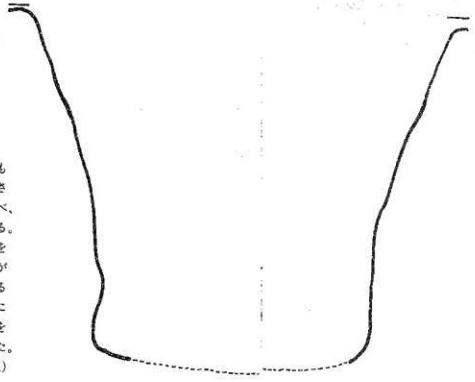
はじめに掘った落し穴

C22とD23グリッド内にあり、ローム面を楕円状に掘り、土壙上面では長軸が231cm、短軸が138cm、底面は長軸が72cm、短軸が25cmある。平面プランは長方形にちかく、下部へゆくにつれ狭く、いわゆる漏斗（ろうと）のかたちをし、深さが302cmもある。底部には尖った杭や串状のものを立てた、と思われる痕跡はない。

本土壙で注目すべきことは、少なくとも2時期にわたって使っていることと、土壙の掘り方が急角度でロームを削り落とした先細り型であること。ここに図示したものは、最初のとき掘ったもの、すなわち古い時期のものである。土壙の断面を見ると、南北がいちじるしく狭いため、たとえば体長150cmほどの猪や鹿が落ちたばあい、途中で宙に浮いた状態になって身動きができない。そのため杭や串状の刺突具のようなものは不要だったのであろう。実際掘っているときでも、壁面に肩がぶつかり、かがむのが困難であった。おそらく縄文時代の人も、苦しい姿勢で掘りすすめたことはまちがいない。成人では体が大きすぎるため、もしかしたら下部を掘るのに子供を、使ったかもしれない。深さ3mの底面にいると、そんな気がする。壁面や底部には動物が暴れまわった痕跡はない。底部に炭化した禾本科植物が少量のこっていた。（清水和明）

1号土壙——再利用した落し穴について——





再利用した落し穴

ここに示す実測図は、最後に使った落し穴のプランである。最初のものと形態は同じであるが、大きさに少しちがいがある。たとえば、深さ184cm、底部の長軸142cm、短軸42cmといったこと。最初のものにくらべ、落し穴の壁を外側にひろげていることが、掘り方の痕跡から推測できる。

もし本土壙がイノシシの捕獲ということを前提にしたばあい、壁面を急角度で掘り下げていることと、長軸にたいして短軸が非常に短いのが特色である。これは獲物が落ちた時に、強い衝撃をあたえ、暴れまわるのをやわらげるためではないか。底部から上120cmぐらいまでは意識的に埋め、その上面を踏みかため、遺物はほとんどない。また最初の土壙を人為的に埋めたのは、なぜか。掘り進めていくうえで疑問がわいてきた。

（大貫真理）

掘さく具について

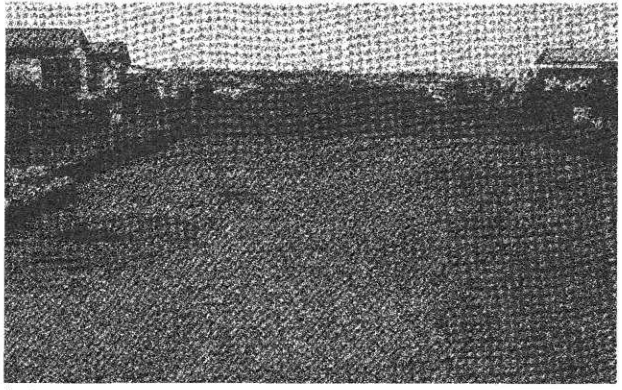
地表面をおおっている黒色土は比較的やわらかく、草木の根さえなければ掘りやすい。しかし、その下にある堆積土、とくにロームはかたい。ロームの壁面を掘り進めると、自然に堆積したものは崩れやすく、落ちたあとに掘さく具の痕跡らしきものもある。

当時は木の棒を尖らし、焦がした掘り棒や打製石斧を使い、植物繊維や蔓（つる）で編んだ籠のようなもので土を運びだしたのではないか。

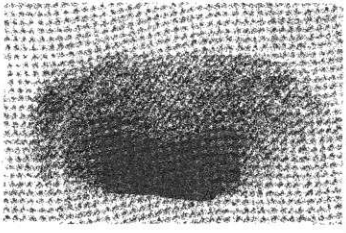
ローム上面から180cmほどまでは、比較的ひろく掘っている。この深さまでは叉状の柄に石斧がついたもので打ちおろして掘れるが、それより下方は、掘り棒か、あるいは真直ぐな棒の先端に石斧をつけたものを使い、上下に動かして掘るほかない。壁面に掘さく痕はないが、本土壙を掘っているときに、このようなことがうかんできた。

（大貫真理）

1号土壙にみる堆積土と出土遺物

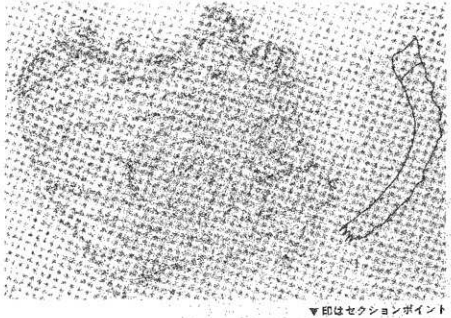


南から見た1号土壙（左上）



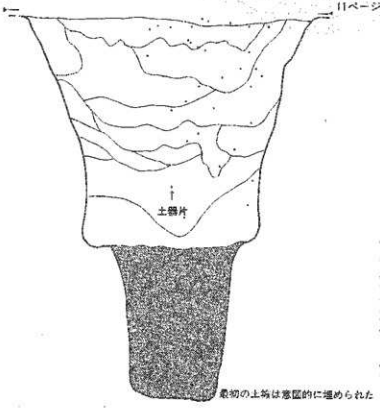
堆積土層　細分すると6層になる。最下層の堆積土は人為的に埋めたもので、踏みかためたらしく、平坦にかためられている。その他の土層は周囲から風や雨で運ばれたものとみえ、中央部にむかって流れこんでいる。土の落ちこみから推測すると、西から東へ、その反対の東から西へ吹く風や流れこむ雨水で埋まった感がつよい。　（清永和明）

出土遺物　土壙から出土した土器片は41点、石の剥片2点で、ほとんどが3層目のロームブロックの多い明褐色土層に埋没していた。土器は縄文時代の前期中葉のものが大半で、繊維土器の出土はなく、胎土にわずかに小砂粒子をふくんでいる。これら土器片は細片で接合できるものはなく、破損した一部を土壙内の北東寄りに捨てたらしい。あるいは風で運ばれたものもあろう。そのうち文様のある大きなものを拓本であらわした。土器片は1層から3層に散在している。　（大貝真理）

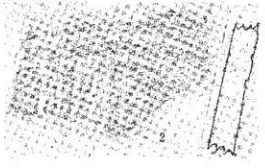


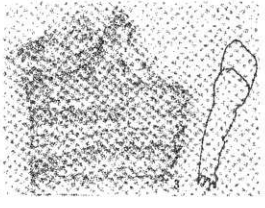
▼印はセクションポイント
11ページの平面図を参照

1. 色調―表は暗灰褐色、裏は灰褐色。　焼成ふつう。　胎土―小砂粒を多く含む。　表は横方向にヘラ磨き。
2. 色調―明褐色。　焼成ふつう。　胎土―砂粒と雲母を含む。細石も含む。　裏は横方向にあらく整形。
3. 色調―暗褐色。　焼成ふつう。　胎土―緻密。裏は櫛で磨いている。

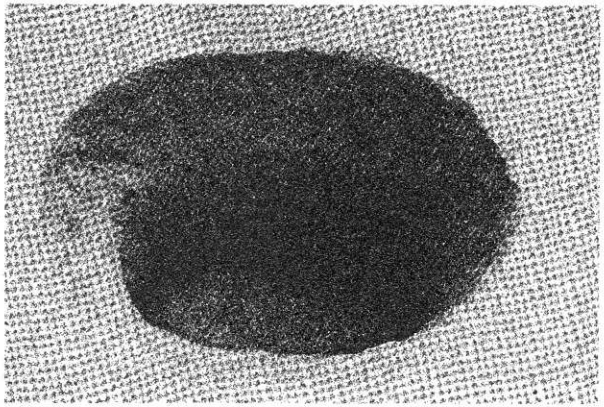


最初の土器は意図的に埋められた





2号土壙について



遺　構　1号土壙の北39mのK41、L41グリッド内にある。この土壙は、2月に八千代市教育委員会で予備調査をしたさい確認されたもので、西側の一部は掘ってある。

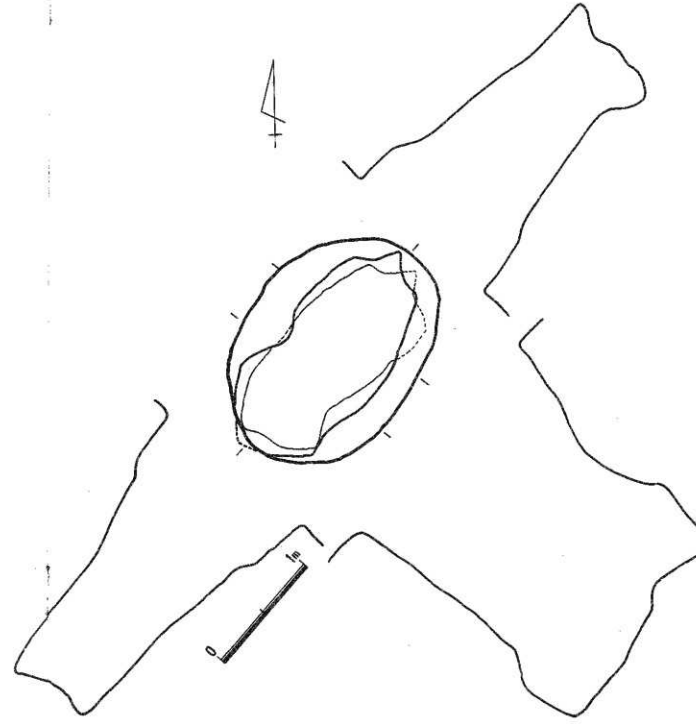
土壙のある付近は、平坦面の端に近い所で西へ10mもゆけば谷へむかって傾斜しはじめる。こうした地形的なことも考慮して、土壙は掘られたのではないか。

つぎに大きさについてのべてみよう。土壙の上部で長軸は196cm、短軸は110cm、下部で長軸185cm、短軸80cm、深さ238cmである。

プランは楕円形で、壁面をほぼ垂直に掘り下げている。短軸の断面図を見ると、底面の中央がやや高くなり、その周囲を幅10cm前後、深さ5ないし10cmの凹みがまわっていることに気付くであろう。いったい、どんな目的でめぐらしたのかわからない。また長軸の断面図の底部を見ると、少し抉られている。底面から30cmほどの高さから不自然に掘ってある。ある推測がゆるされるならば、落し穴にかかって動物が土壙内で鉈（もが）いたのもかもしれない。上部にのこっている掘きくとはちがっているが、それをうらづける資料はない。また、底面に杭のたぐいを立てた痕跡もなかった。

なお、土壙上面から120ないし180cmの明褐色土層に茎状の炭化した植物が検出された。炭化したものは、一握りほどの塊であったり、ごく少量がまとまって出たり、壙内に散在している。周辺の土を詳細に観察したが、焼けた状態や灰が多量にあるということもなかった。こうした炭化植物の痕跡は、他の落し穴と考えられる土壙から同じような状態で確認された。どうも穴の上部から燃えた状態で投げ入れたとも考えられる。

（佐藤　誠）



2号土壙の土層と出土遺物

土層　本土壙の堆積土は層位が整然とし、どのような過程で穴が埋もれていったかがよくわかる。そこで7層から成る堆積土について、上から下へと順を追ってのべてゆこう。

1層は褐色土で、炭化粒子をわずかふくんでおり、もっとも新しい時期に流れこんだものである。

2層は暗褐色土が凸レンズ状に溜っている。

3層はローム粒子を多く混じえた明褐色土がつづく。

4層は、3層と成分はほとんど変らず、ただいくぶん硬質なのと、やや褐色がかっていることである。

5層は明褐色土で、ロームの粒子と15cm前後のローム塊が多く混入している。

6層はローム粒子に、さらに大きさ20cmほどのロームブロックが多い。この層から茎状の炭化した植物が出てきた。

7層は明褐色土で、ロームブロックはなく、ローム粒子を多量にふくむ層位である。

ことに5層と6層には、15から20cmほどのロームブロックが多量に混入したのは、もしかすると自然現象によって壁面が剝落したのかもしれない。

3層から7層にわたって、かならずといってよいほどロームの粒子が認められる。おそらく、このころまで赤土が地表面にあらわれた地点があって、そこから風や雨水で運ばれたのかもしれない。粒子は少しばかり丸味をおびている。

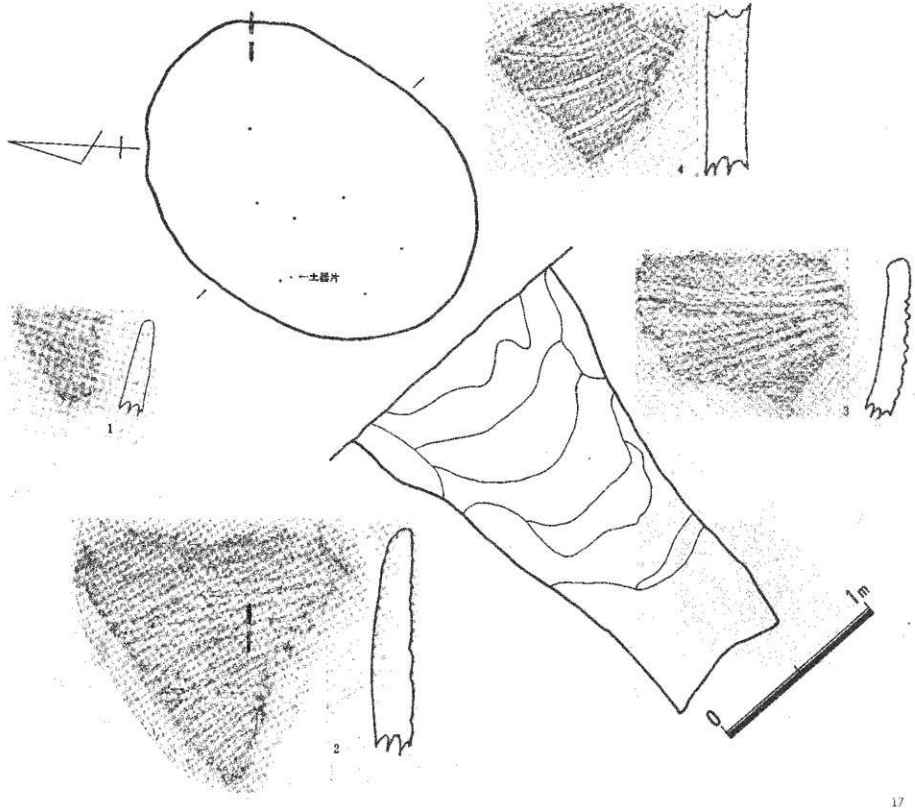
出土遺物　たった土器片が8点確認されたにすぎない。土壙上面から30ないし60cmのレベルで4点、90から100cmの所で2点、あとは140cm、180cmでそれぞれ1点である。180cmのレベルに1点まぎれこんだものと、30cmの所で出たものとでは時間的な差を論じるほどの確証はない。

では文様のはっきりしたものを数点えらんで説明をしておこう。1は縄文を施文した唯一の例である。これ以外は、すべて半截竹管による平行沈線文をほどこしている。乳鉢の口縁で、胎土に多量の植物繊維を混入しているため、その部分が黒く焼けのこっている。

3は、いわゆるキャリパー状をなす器形の口縁部で、胎土にこまかな石をくだいて意図的に入れ、焼いている。沈線は2・4とともに力強く走り、焼成もよい。2は波状口縁の一部で、胎土がよくこねられた緻密で褐色をしたものである。この土器片が炭化物と一緒に黄褐色土層から出た。4は半截竹管を工具にして平行沈線を蛇骨状に走らせたり、竹管を上から押しつけて円文を施文している。みごとな焼きあがりで、暗褐色をした硬質のものである。

これらの土器は、文様からして縄文時代の前期中葉とみてよい。

これだけの量では、放棄した穴に土器片を意図的に捨てたかは判断できないが、遺物は穴の中央に集中していた。　（佐藤　誠）

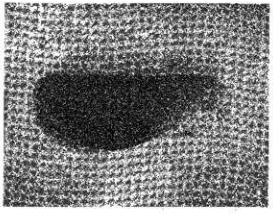


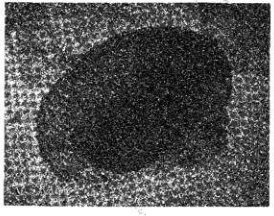
3号土壙について

遺　構　1号土壙の南約27mのE8、F8グリッド内で確認された。土壙上面の一部が遊園地を造るさいに削られてしまったが、プランはつかめる。大きさは上部で長軸が245cm、短軸が180cm、下部で長軸が116cm、短軸が53cm、深さが160から173cmで、楕円形をしている。

土壙はハードロームに掘っているので、壁面ののこりがとてもよく、底部は堅く踏みかためたままである。壁は南北側が直線的に掘り下げているのにたいし、東西は傾斜をゆるやかにとっている。これは掘さくしやすくするためにしたものか、あるいは獲物の習性を意識してのことか不明である。

このあたりのロームと2号土壙のロームとでは硬さがちがうようだ。掘さく痕らしきものから判断すると、先端の尖った棒状のもので掘ったらしく、壁面に付着した堆積土の剥れる量が少なく、まるで棒で崩しているかのように落ちていく。



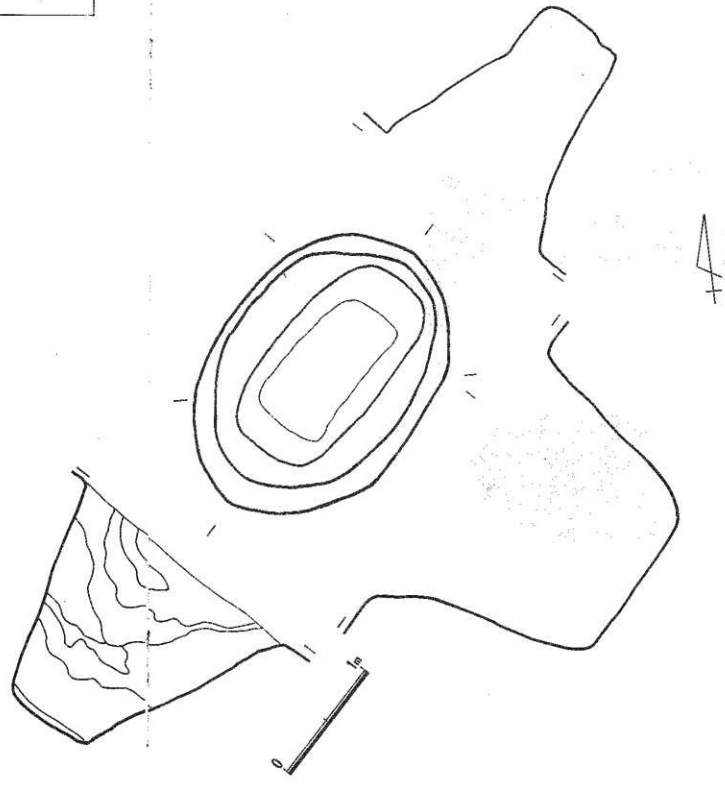


土壙の底部に立ってみると、壁面がそそりたっているようで、人の助けをかりないと登ることはできない。

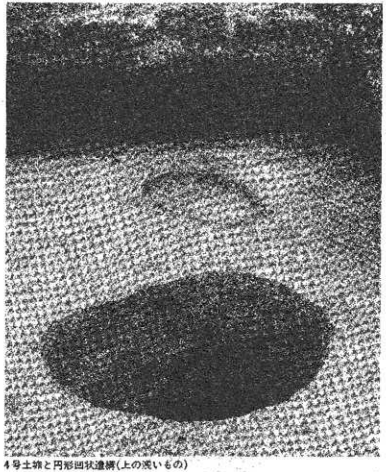
土　層　埋没した土は5層にわけられる。1層はローム粒子や炭化粒子をふくんだ粘性の強い暗褐色土。2層は褐色土。3層はローム粒子やロームブロックを混入した明褐色土。4層は上部が踏みかためられ、下部はしまりが弱く、黒色土の混ざった明褐色土。5層は粘性の強い暗黄褐色土で、ロームが主体をなし、植物性の炭化物が束状になって検出された。

4層のみが人為的に土を埋めて踏みかためているのがふしぎである。

（山本賢一郎）



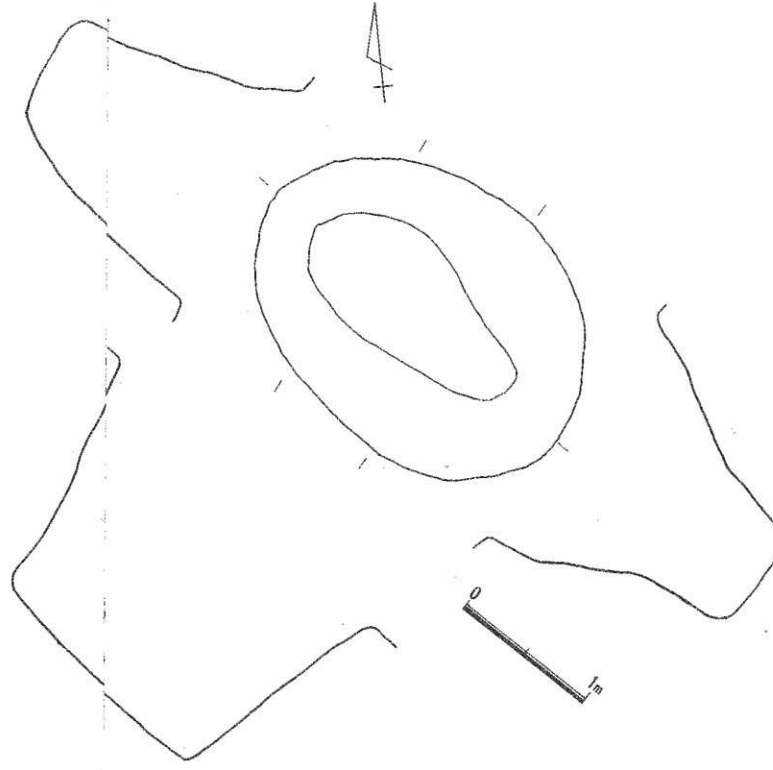
4号土壙について



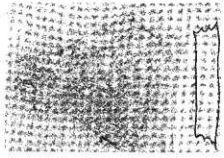
4号土壙と円形凹状遺構(上の浅いもの)

遺　構　2号土壙の西約28mのB53とC53・54グリッドにまたがっている。北西の斜面、おそらく隠れ谷が入っていたと思われる方向にある。壙の上部の長軸は245cm、短軸は181cm、下部の長軸は165cm、短軸は79cmで、楕円形を呈する。

掘り方は、他の土壙にくらべて、長軸の壁を真直ぐに掘さくし、短軸も斜度をとってない。底面をひろく、平坦に掘っており、杭や串状のものを立てた痕はなかった。　(上野昌之)



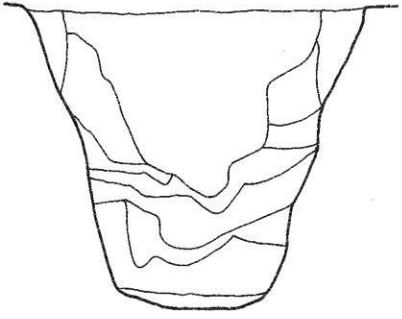
4号土壙の堆積土と遺物

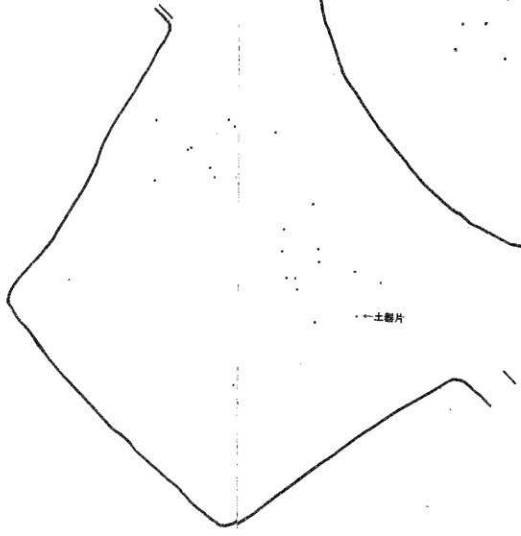


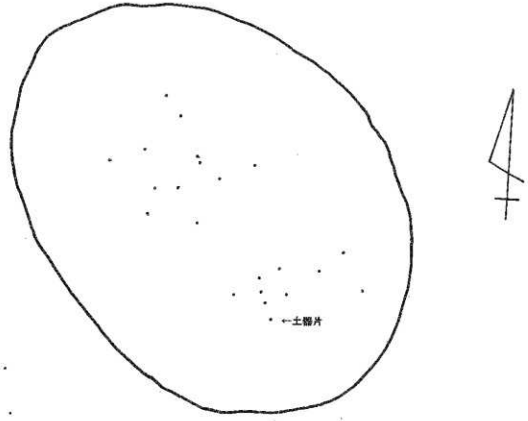
堆積土　黄褐色土層と黒色土層が交互に9層にわたり、壁際から中央へむかってゆるやかな傾斜で埋没している。1層の黒色土は真中にのみあり、3層と4層を分けている。2層は黄褐色土で壁の上部が落ちこんだもので、3層はローム粒子と黒色土が混在した暗黄褐色土である。4層はロームを主にし、5層は黒色土、6層はロームブロックの入った黄褐色土で、このあたりまで土器片が流れこんでいる。最下層に茎状の炭化植物が散在していた。

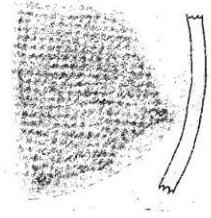
遺　物　出土したものは縄文時代前期の中葉に比定される土器片のみである。だいたいが中央部に集中し、出土レベルもほぼ同層位で、22片確認された。ここの土器片は流れこんだというよりも、故意に投げ入れたような状態である。これは出土状態から感じられるもので、確実なことはいえない。（上野昌之）

4号土壙の埋没土の状態



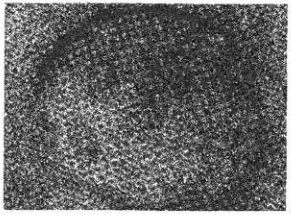






0　1m

円形凹状遺構について



本遺構のよびかたであるが、土壙とよぶには前記したものとあまりにもちがうため、便宜的に、この名称を使った。

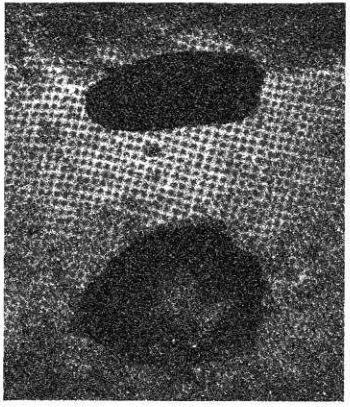
確認された地点はA53・54とB53・54にまたがったグリッドからである。大きさは長軸が165cm、短軸が108cmの楕円形をなすもので、東半分が浅く平坦で、西半分がくぼんで鉢状を呈する。深さは、東側が15cm、西側が20cmと浅いもので、壁の立ちあがりはゆるやかである。

遺構はローム面を浅く掘ったもので、覆土をとりのぞいたとき、ローム面にくっきりとプランをしめしていた。外側に粘性のしまった暗褐色土が、つぎに褐色土、暗褐色が流れこんでいた。

遺物は、暗褐色土の中から小破片が1点出ているが、これは混入した可能性がある。わずかにみられる縄文からして、前期のものと推測できる。

この浅い凹状遺構が、どんな目的で掘られたのか見当がつかない。付近には4号土壙が接するような位置にあり、はたしてそれと関連をもつのやら、また隠れ谷に落ちこむ所にあるのは、なぜか。自然にできたものではなく、人の手で掘られ、4号土壙に近い西側を深めにしていることから、人工のものと判断した。（坂　俊明）

炉穴（ファイヤー・ピット）について



炉穴（下）と3号土壙

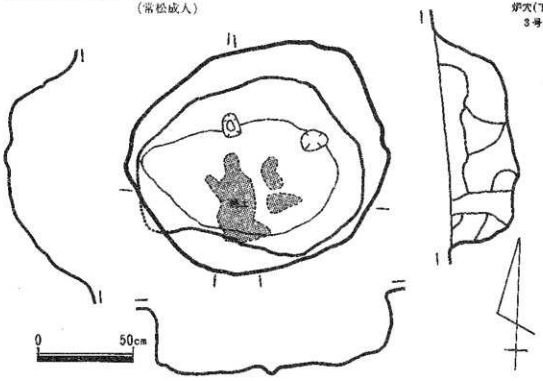
3号土壙の南に隣接したD6・7、E6・7グリッドにまたがって見つかった。ハードローム面をほぼ円形に掘ったもので、穴の上面で長軸が135cm、短軸が120cm、底面は長軸100cm、短軸60cm、深さ35cmである。

穴は単独の小型のもので、壁は垂直にちかい状態につくられ、南側の部分が加熱で焼け、底面には焼土が固まって3ヵ所ほどにある。壁や底の焼けぐあいからして、ここではさほど火を使わなかったともとれる。

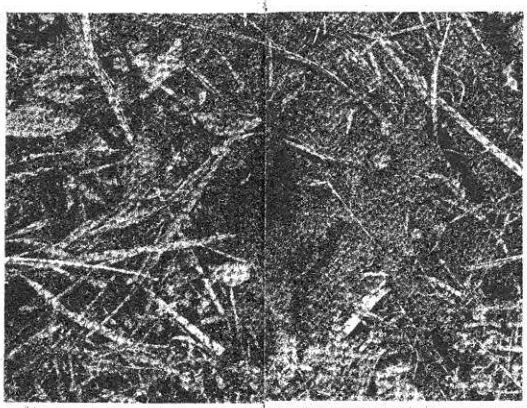
穴の北側底面が人足によって固まったのか、かちかちになっているので、おそらく、ここに腰をすえて木を燃したのではないか。焼土の塊の前方に、二つの径10cm前後の浅い孔がある。あたかも薪鉢を置くための孔ではなかったか、とも思わせるようなものである。

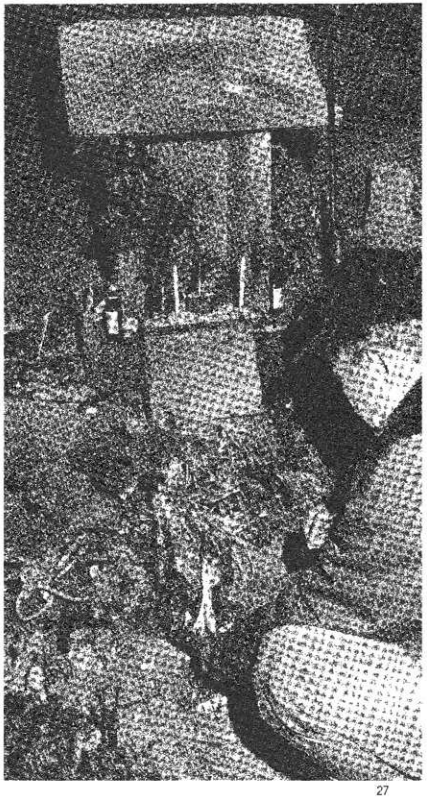
木炉穴は、八千代市教育委員会が予備調査をしたときに確認されたもので、3分の2ほどが掘られてあった。この調査の段階で、縄文時代早期の土器片が出たとのことである。こんかいは、攪乱土層から波状貝殻文をほどこした前期の浮島式土器が見つかった。

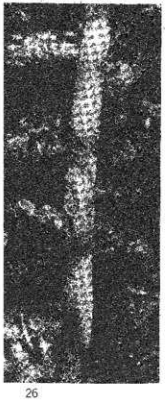
（常松成人）

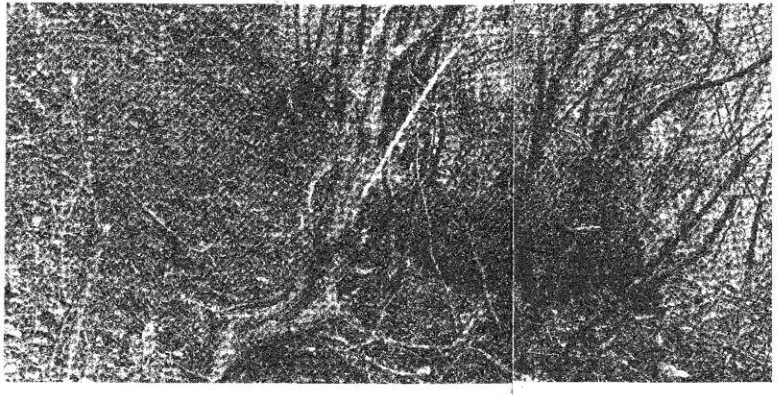


大淵入遺跡の素描 1









大溜入遺跡の素描2

市内の遺跡　八千代市内からもつぎつぎに発掘調査報告書がだされ、先史から歴史時代までの生活像が、おぼろげながらつかめてきた。たとえば『八千代市村上遺跡群』では弥生から古墳時代の集落の実態がわかり、930年につくられたわが国最初の百科辞典ともいうべき『倭名類聚抄』にでてくる《村神郷》であることもつかめた。『阿蘇中学校東側遺跡』からは弥生時代の住居群の、『桑納前畑遺跡』では縄文時代の小竪穴群の、『睦小学校遺跡』からは掘立柱建物群の報告がされている。また近年中に刊行される萱田遺跡の報告は、村上遺跡とともに双璧になろう。

これらにくらべると、大溜入遺跡は規模も内容も劣るものである。しかし、市内では類例の少ない縄文時代前期中葉の時期であることは、いままでの遺跡との空白期を埋めることになる。こうした積み重ねが歴史にとって大切である。

大溜入の住人　約6000年前の縄文時代前期は、海進の著しい時代である。関東地方の低地やおぼれ谷の周辺に、貝塚があまた分布するのはこのためである。東京湾の東岸地域には、早期の終りごろから貝塚がつくられ、中期に最高となり、後期後半になると数は減る。八千代市で貝塚をともなう前期遺跡の発掘例はない。貝塚そのものが少ないのである。では、なにを食べて生活していたのであろうか。おそらくクルミ、トチ、カヤ、カシ、シイ、ドングリといった木の実やヤマイモなど、植物質に依存する度合が高かったと考えられる。それからシカ、イノシシの類を好んだ。この他に海の幸にめぐまれた所では魚介類を多く食べているが、内陸部の八千代はあてはまらない。

本遺跡は住居をともなわないため、土器の出土が少ない。土器の型式からすると、諸磯系と浮島系に二分できる。量的にみると半截竹管による平行線、弧線、助骨線、爪形文、縄文など諸磯系のものが多く、なかでも諸磯b式がめだつ。霞ヶ浦周辺に多い浮島系も出ており、文様は貝殻腹縁を連続した押捺文や連続刺突文も出ている。この両者が共存した地である。

土壙が存在するのに石斧はなく、解体処理に使った道具も出てない。

では、かぎられた資料から当時の生活の一部をかいまみることにしよう。

狭い範囲に存在する少ない遺構と遺物から、本遺跡の性格をとらえることは容易でない。しかし、なんらかの方法でアプローチし、その性格をつかむ必要がある。

こんかいの発掘では土壙と炉穴、それに少数の遺物が出土したにすぎない。このなかで問題にするものは土壙であろう。これをとうして、本遺跡の性格を探ってみたい。おそらく、土壙はイノシシを捕るために掘ったと思う。そこで、まずイノシシの習性を紹介しておこう。

イノシシ　山中の水の湧く所や湿地にかならずきて、泥を体中にぬる。それは毛にたかるダニやシラミ・ノミを落すため、ヤブカに刺されるのを防ぐため、湿地にいるミミズやサワガニを食べるためとかいわれている。地方によっては、谷の奥まった水の湧く場所で、イノシシが体に泥をぬったりすることを《ノタウツ》という。

イノシシの通る道（ウソと呼ぶ所もある）筋に繁る草や木に、ノタ場から100m余にわたり、イノシシの体にぬった泥がついていることがよくある。さらにかゆみをとるため、近くのマツ・カラマツ・モミ・ヒメコマツ・ツガなど樹脂（やに）を多くだす立ち木に、体をこすりつける。そこでこれらの木にはイノシシの毛や泥がたくさんついている。

イノシシは胴と首の太さが変らないから、急に曲ることや小回りがきかない。目もあまりよくないので、遠くや高い所は見えず、夜行性の動物のため色にうとい。しかし鼻はよく、1kmほど先の匂いまでかぎわけるという。

イノシシは大食らいで、ふつうのもので60kgほどの体重がある。好物はサツマイモ、ヤマユリの球根、タケノコ、ヤマイモ、トチ、クリ、カシなどの木の実、ヘビ、マムシである。

隠れ場、寝ぐらは薮場（ボロー）や平坦な地や山の中腹につくる。そこはグミ・アケビ・ヤマブドウなど蔓科の植物がからみあい、陽もとおさない所である。隠れ場所は地面を長方形に掘り、その中に落葉や枯葉を敷き、上には長い草で覆う。この住み家をつくるため、茅を根元から30cmぐらい上のところを、長さ20から30cmほど歯でかみきる。それを口にくわえて10から20m、あるいは200m余り運び、1か所にまとめ90cmほどの高さに積みあげる。その中で寝る、という。

6、7月に穀み家で子を産み、そこで2、3か月間育てる。10月の初旬、母猪に遮られていた子猪は離れる。

夏季は体毛が薄くなるので、ヤブカやノミ・シラミ・イエダニなどに攻められ、やせこける。11月になると脂肪がのり、まるまる太り、大寒をすぎると寄生虫も少なくなる。

民俗例からすると、落し穴は4月に掘る。周囲2m、深さ2m以上のもので、穴の上に木の枝を敷き、その上に土砂をのせて擬装する。やがて秋になると、のせた土に野草が茂り、穴の存在はイノシシにわからなくなる。

落し穴は、イノシシの出る道《ウツ》めがけてつくる。夏から初秋にかけて《カリ》につくそうだ。また暴れまわるイノシシから家族を守るため、防禦的な目的で集落近くに落し穴を掘ることもある。

本遺跡のばあい、住居跡の確認ができなかったので決めがたい。ただ地形的にみると、隠れ谷があり、そこへ通じる場所にある。かつて、斜面下に湧き水がみられ、隠れ谷は広い谷戸へつながっていた。

土　壙　このたび確認できたものは4例にすぎないが、いずれも動物を捕る目的で掘っている。大きさや構造的にも、イノシシ用の落し穴にふさわしい。深さが2mちかくあり、落ちたときは足が底につかず、穴にすっぽりはまった状態になる。これでは死にもの狂いに暴れまわるイノシシも動きようがない。おおかたの落し穴の底面には竹か木を槍のようにつきさした跡があるが、本遺跡ではみられなかった。

土壙内から出土したものは縄文土器の破片が少量である。前期の諸磯b式・c式、浮島I式・II式期に該当するもので、霞ヶ浦周辺に多く分布するものが、このあたりまで広がっていることがわかる。4号土壙のほかは、土壙内から細片の土器がわずかであるが、捨てられた状態で出てきたことは、近くに人間が住んだ、と推測できる。

また土壙の中より炭化した茎状の植物の塊が出ている。それが各土壙にみられるのは、いったいどんな意味があるのであろうか。

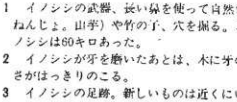
本遺跡の調査は、かぎられた狭い部分であったが、いくつかの課題がだされたことは、縄文時代の前期の生活像を考えるうえで参考となる。

（関　俊彦）

参考文献

霧ヶ丘遺跡調査団『霧ヶ丘』1973
坝藤　功「けもの風土記・猪」（『あるくみるきく』170・1981）
直良信夫『狩猟』1968
早川孝太郎『猪・鹿・狸』1926

26～27ページの写真説明



1　イノシシの武器、長い鼻を使って自然薯（じねんじょ、山芋）や竹の子、穴を掘る。このイノシシは60キロあった。
2　イノシシが牙を磨いたあとは、木に牙のすごさがはっきりのこる。
3　イノシシの足跡。新しいものは近くにいるあかしで、狩人は気をつける。
4　暴れまわるイノシシ。半径3mはどの範囲が地滑りをおこしたように、地肌が削られ、樹木に牙の跡が無数ある。何本もの木が根こそぎぬかれ、狂暴さがうかがえる。
5　《しし檻現》。狩りの神として狩人の信仰の場で、洞穴の中央には山の神の像を刻んだ祠がある。まわりにはイノシシの下顎や頭骨がつまれ、信仰はいまも狩人たちの中で生きづいている。女人禁制である。

Otomeiri Site

Otomeiri site is situated in the east of Yachiyodai in Yachiyo city in Chiba Prefecture. The site was formed in the early period of the Jomon Age, about 3000 B.C.. It has some pitfalls for catching wild boars, deer.

The georgraphical surroundings around the site are much suited for human life for a short periods of time.The plateau is higher than the valleys by30 meters and is surrounded by valleys from three directions. There are also springs along the skirts of the plateau. The plateau where ancient people dweiled has much sunshine and the wind blows through the trees, and it is well drained and commands a fine view.

Some plateaus with the same georgraphical conditions are distributed around the site. Though they are situated away from seashores and lakes, they comparatively well supply human life with vegetable and animal foods. However they could not supply food to large numbers of people for several years. Perhaps groups of twentie could barely live for a year or two. Because the excavati on did not reveal any mark of dwellings the ancient people who made the pitfalls, we cannot say how many people lived in this site. Also, we cannot find any site of dwellings except the four pitfalls which lie scattered there, we cannot assert whether the purpose of the pitfalls was to catch game or to prevent animals from entering their area.

What kind of animals would be caught by the pitfalls? Because the bones of animals and their fragments were not found in each pitfall, they are only to be inferred. They are thought to be wild boars in view of the topographical conditions and the form of the pitfalls.

The pitfalls No .2 and No .4 are near the slope of the plateau toward the valley. The size, the depth and the form of them would be decided by the figures of the wild boars. On the whole four pitfalls have at the upper part long axes of 190-240 cm, short axes of 110-180cm, and at the lower part long axes of 70-190cm, short axes of 25-80cm, and the depths of 160-300cm. The plane surfaces of the pit are elliptic. If a wild boar fell into one of the pitfalls, he would be caught in the narrower middle, his legs not reaching to the bottom, he would be in able to act violently.The reason being that the middle of it is formed to become narrower than the upper part of it.

The people of the Jomon Age lived by hunting, fishing, and gathering foods. The people in Otomeiri site lived by gathering vegetable foods and hunting wild animals. They must have been taught the habit of wild animals from childhood, and they would know them well.

Let's learn the habit of a wild boar. A wild boar lives in the woods, he comes down to a swamp, eats swamp-crabs and soaks his hot body. He sleeps in the bush in the daytime and he is active at night. A wild boar is very careful and sensitive to colors, sounds and smells. For example, he hides himself should at the slightest hibernates smell of man come from the wind. He from summer to the beginning of autumn. The place is usually a bush near a mountain peak. He digs the flat ground in the form of rectangle, spreads fallen leaves and withered grass on the floor and covers it with a kind of a long torreya as it the ceiling.

Wild boars have supplied rich protein with Japaneses from 7000 B.C. to the present age. The long history between wild boars and human beings is told in the Japanese literatures or folklores.

Toshihiko Seki
Megumi Akama
Junko Hiwada

大溜入遺跡発掘参加者

発掘　関　俊彦、佐藤　誠、上野昌之、常松成人、山本賢一郎、赤間　恵、内山新吾、大貫真理、岡本聰子、小川恵子、上岡　修、坂　俊明、桜井美有紀、島津一英、清水和明、須藤智夫、宗　正夫、高倉規行、田中由香利、日和田順子、中島雅子、橋本正人、保坂裕興、松田昌治、牧野祐介、湊　裕明、山岸康子、小野浩一

整理　関　俊彦、佐藤　誠、石本ゆかり、岩崎浩美、岩田直樹、上野昌之、大平佳代子、鴨　美穂子、川口みゆき、北田　豊、熊崎　保、小嶋ゆう子、佐藤幸二、角倉哲志、曽川誠之、常松成人、矢野文明、山本賢一郎、栗野三奈子、大久保佳子、佐鳥昌子、白子真知子、高橋陽子、玉川万里子、吉谷　淳、赤尾美弥子、赤間　恵、内山新吾、大貫真理、岡本聰子、小野知子、坂　俊明、桜井美有紀、島津一英、清水和明、須藤智夫、中島雅子、日和田順子、松田昌治、山岸康子、山崎智江、山崎祥江

執筆者　関　俊彦、佐藤　誠、上野昌之、常松成人、山本賢一郎、赤間　恵、内山新吾、大貫真理、岡本聰子、坂　俊明、桜井美有紀、清水和明、須藤智夫、中島雅子、日和田順子、松田昌治、山岸康子

協力者　朝比奈竹男、河村卓哉、菊池真太郎、菊池誠一、北沢　広、阪田正一、佐久間豊、斉藤和弘、鈴木隆三、須藤　功、広瀬雄一、福田和雄、堀越正行、黛　弘道

写真　北沢　広、須藤　功、日本観光文化研究所

報告書レイアウト　北川佳代、佐々英子、薗部恵理子

調査会メンバー　会長―村田和彦、副会長―黛　弘道、朝比奈竹男、河村卓哉、佐久間　豊、清水盛人、鈴木隆三、関　俊彦、福田和雄、村田一男

八千代市大溜入遺跡
1982年３月30日
関　俊彦　編
大溜入遺跡調査会
千葉県八千代市教育委員会